

台湾人の傍らに憂いを抱いて立つために

十月に台湾高座会留日七五周年歓迎大会を開催

高座日台交流の会会長・本会副会長

いしかわ
石川 公弘
きみひろ

台湾少年工顕彰碑を建立

ずいぶん先のことと思われていた今年十月二十日に開催予定の「台湾高座会留日七五周年歓迎大会」がいよいよ数カ月後に迫ってきました。多くの人が「いいよいですね」と声をかけてくれ、盛り上がりを感じます。

それと同時に、いろいろとアイデアをいただきます。素晴らしいものばかりですが、なかなかすべてやるわけにはいきません。でも、日本李登輝友の会・柚原正敬事務局長からの提案、台湾少年工顕彰碑はまず着実に進んでいます。三首の歌と台湾少年工の功績を刻む顕彰碑は、すでに大和市の天野石材店に発注し、遠藤三紀夫・座間市長から芹沢公園をとのご支援をいただいています。

十月二十日午前には素晴らしい除幕式が行われることと思っています。午後は大和で歓迎の式典とイベントです。

八千の台湾少年雷電を

造りし歴史永遠に留めん

高座日台交流の会 石川 公弘

北に对き年の初めの祈りなり

心の祖国に栄えあれかし

台湾万葉歌人 元少年工 洪 坤 山

朝夕にひたすら祈るは台湾の

平和なること友の身のこと

元伊勢原高女勤労挺身隊 佐野 た香

二〇一八年一〇月二〇日

台湾高座会留日七五周年歓迎大会記念

顕彰碑の由来は、歓迎大会会長の甘利明・衆議院議員にお願いしました。台湾少年工の功績を永くこの地に刻むことでしょう。

台湾少年工顕彰碑の由来

先の大戦中、航空機生産の労働力不足に直面した日本海軍は、その供給源を向学心に燃えていた台湾の若者に求めまし



「台湾高座会留日70周年歓迎大会」で森喜朗・元内閣総理大臣からの感謝状を手にする台湾高座会の各地区代表者（2013年5月9日、神奈川県座間市市民会館ハーモニホール座間）

た。新鋭戦闘機（雷電）を生産しながら勉学に励めば、旧制工業中学の卒業資格を与え、将来は航空機技師への道を開くとの条件に、多くの台湾少年が応募し、選抜試験を突破した八千四百余名が、海を渡って高座海軍工廠のあったこの地（神奈川県高座郡）にやってきました。

戦局はすでに下り坂で、彼らが求めた勉学の機会ほとんど無く、その上新設の高座海軍工廠には十分な設備が無かったため、大半が全国各地の航空機工場へ派遣され、慣れない寒さやひもじさに耐えながら懸命に働き、非常に高い評価を得ました。しかし米軍機の空襲などで六十名に上る尊い犠牲もありました。

一九四五年八月一日の敗戦により、志半ばで帰国した彼らを待っていたのは、四十年の長きにわたる戒厳令下の厳しい生活でしたが、それにも耐え抜き、戒厳令が解除されると直ちに同窓組織・台湾高座会を発足させ、李雪峰氏を会長にして日本との密度の高い交流を重ねてきました。

二〇一八年は、台湾からの第一陣が日本本土へ上陸した日から数えて七五年になります。私たちはこの機に台湾高座会留日七五周年歓迎大会実行委員会を組織し、台湾高座会の戦時下の貢献と戦後における台湾最大の親日団体としての活動に感謝の意を表すため、台湾少年工顕彰碑建立を計画しました。

なお、台湾高座会の皆さんが今もこの高座の地を「第二の故郷」と呼ぶのは、工廠のあった高座の地の多くの農家のお母さんたちのやさしさに源があるようです。この顕彰碑は当時の農家のお母さんたちへの感謝の碑でもあります。

二〇一八年一〇月二〇日

台湾高座会留日七五周年歓迎大会会長 衆議院議員 甘利明

平和な生活の裏にあった悲しい現実

先日、中学時代の同級生に勧められ、「人生フルーツ」という素晴らしく穏やかな映画を見ましたが、その中に突然出てくる一台湾少年工とこのドキュメンタリーの主人公である元日本住宅公団のエース・津端修一さんの話が衝撃でした。涙無しには見られませんでした。

戦時中、東大から志願して高座海軍工廠に赴き、戦闘機雷電（らいでん）の設計に携わっていた津端中尉は、将校だけが優遇される生活に違和感を覚え、台湾少年工の寄宿舎で彼らと一緒に生活していました。発足したばかりの高座海軍工廠は設備が十分でなかったため、全国の優良軍需工場へ台湾少年工を派遣しました。津端中尉も一千名の少年工を指揮して三菱航空機製作所名古屋工場へ赴任しました。その名古屋工場で、中尉は少年工のリーダー格だった陳清順さんを弟のように可愛が

りました。戦争が終わり別れの時に、陳清順さんは「津端」と自分で彫った印章を中尉に贈ったのです。

その印章を津端修一・英子夫妻は実印として永く使用していました。夫妻は自らの生活を描いた新書の発表会を台湾で開くことになり、陳清順さんの消息を調べました。

そこで津端さんは、長く続いた戒厳令下の台湾で、陳清順さんが政治犯として銃殺刑に処せられてことを知りました。

夫妻は墓参りをし、永年使用してきた印章を彼に還そうと思いました。台湾少年工の今も続いている同窓組織、台湾高座会の役員たちが津端夫妻を迎えました。李雪峰会長、宋燈山副会長、謝清松総幹事夫妻、林幹事、陳鵬仁名誉教授などの懐かしい顔が見えました。

二〇一四年八月一日の午後、津端夫妻は陳清順さんの墓を訪ねました。政治犯を大事にすることは許されなかったのか、小さな石の墓が墓地の端の空き地にひっそり立っていました。ただ、陳清順の墓と刻まれた文字は真っ赤に塗られていて、銃殺のとき流れた彼の血を思わせ、亡き人の怒りを表しているようでした。

夫人が終生大切に使ってきた「津端」の印章をていねいに墓前に埋め、花を供え、津端修一さんは墓前にひざまずいたまましばらく動きませんでした。突然、墓石を抱えるようにして、「台湾軍」の歌を歌い出しました。

太平洋の空遠く 輝く南十字星

黒潮しぶく 椰子の島

荒波吼ゆる 赤道を

悲しみがこみあげてくるのか、途切れ途切れです。しかし最後まで間違いなく歌われました。「台湾軍」の歌は台湾少年工が喜びのときも望郷の思いを振り払うときも歌う、勇気を奮い立たせる歌です。おそらく陳清順さんも、銃殺される最期のときに、心の中で叫ぶように歌ったにちがいありません。そう考えると、私の眼からは涙が止めどなく流れ出しました。台湾高座会にも悲しい歴史があるのです。

津端元中尉は「自分が死んだら骨は南太平洋に散骨するよう」遺言したそうです。それはおそらく、南十字星の輝くところ、陳清順さんの眠っている近くなのです。夫人は映画の中で、「私が死ぬまで主人には待っていてもらおう」と言わしました。

「優しさと人への傍らに憂いを抱えた人」

ノーベル化学賞の根岸英一博士には台湾高座会の留日七十年周年歓迎大会などで大変お世話になりました。特に台中で開催した「ありがとう台湾・がんばれ東日本コンサート」には台湾のノーベル賞・李遠哲博士と共演していただきたいへんな話題になりました。

そのすみれ奥様が先日天国へ召され、教会で告別式がおこなわれましたが、先の言葉はその時の牧師さんの言葉です。人と憂いを共有する。優しさの原点です。また、優しい心を持った人でないと他人の優しさを理解できない。若いころ、アメリカで根岸博士と苦勞を共にされたすみれさんは、多くの後進を助けたとのことでした。

新竹区会の廖受章さんが、留日七五周年記念誌に率直に書いていますが、戦時中の台湾少年工の皆さんが受けていた待遇は決して、ほめられたものではありません。餌のような雑穀飯、寒さとひもじさ、安眠を妨げるのみしらみ。爆撃の危険、約束した中学は卒業できず、航空機技師への道も閉ざされたまま。それでも、彼ら台湾高座会は戦後の台湾で最大の親日勢力として振る舞ってくれました。

台湾高座会の人たちは戦時中、わずかに示した日本人の優しさを敏感に感じ取り、それを倍にも十倍にもして返してくれたのです。優しさを理解できるのは、優しさを持つ国民だけです。

いま台湾は自由と民主主義の問題で大きな憂いを抱えています。巨大な独裁国家が不法な圧力を加えているからです。この彼らの憂いを日本人は自らの憂いとして理解し、彼らの傍らに立たなくてはならない。私たちは、留日七五周年歓迎大会を機に、こうした考えを更に確固としたいものです。